

幼稚園教室における保育会話の構造

森一平（東京大学大学院）

1. 本研究の目的

本研究は、「学級的な相互行為秩序はいかにして存立可能か」という問いに答えるためのプログラムの1つとして位置づけられる。本研究は具体的に、幼稚園の3歳児クラスにおける設定保育場面の相互行為を、会話分析的に記述することをもって、上記の問いに一部、答えようとするものである。

上記の問いに対して貢献しうる日本の先行研究としては特に、Mehan (1979) の影響を受けながら展開している、授業の会話分析的研究の存在が挙げられる。授業の会話分析的研究は、決して十分とは言えないまでも、授業場面で営まれる会話の秩序構造を記述する方向で、一定程度蓄積を重ねてきた。しかし、これらの研究の焦点は、狭義の学校、すなわち小学校や中学校の相互行為過程に限定されてしまっている。当然のことながら学級という場合は、狭義の学校に限定されるものではない。幼稚園や保育所の教室、大学の講義場面なども、学級的な相互行為が営まれる場であるといえる。そこで本研究の第1の目的は、学級的な相互行為秩序を記述するというプログラムを、幼稚園という、これまで研究の蓄積されてきた狭義の学校とは別の文脈で実行することにある。

幼稚園の設定保育場면을会話分析的に記述・分析することによって導かれる帰結としては、次の3つの可能性が考えられる。1つ目は、幼稚園保育という文脈に独特な会話の形式的構造が見出される可能性。2つ目は、(狭義の) 学校／幼稚園という制度的文脈を越え、授業会話と同様の構造が、保育会話にも見出される可能性。3つ目は、授業の会話構造と同様の構造が見出されつつも、それとは別に幼稚園保育に独特の構造が見出される可能性である。本研究の第2の目的は、これら3つの可能性のうち、いずれが現実のものであるのかを検証し、そのことが包含する重要性を導出することである。

2. (一対一) × 多形式

まず記述された会話の形式的構造は、とりわけ製作作業場面などにおいて頻繁に見ることができるもので、先生と園児達が一対一で会話を展開していく、日常会話に近いものである。この会話が日常会話場面と決定的に異なるのは、それが先

生カテゴリーを絶対的中心として、先生—園児の一対一会話が連鎖的に組織化されているという点である。それは具体的には第1に、先生—園児Aの会話が既に組織化され、いまだ継続中であるにもかかわらず、園児B、C、D…が会話を構成する成員の位置を奪取しようと、次々と先生に発話を投げかけるとのこと。第2に、先生の側も、会話の相手である園児を半ば強引にシフトさせていくこと。すなわち先生が、園児Aとの会話を途中で打ち切ることも厭わずに、園児B、C、D…と、次々と会話の相手を変更していくということ。第3に、例えば園児同士の会話がなされている最中だとしても、先生との会話が優先されるということ、例えば園児A—Bの会話が進行している最中に、先生が園児Aに対してシークエンスの開始を要求する発話を投げかけると、園児A—Bの会話は途中で打ち切られてでも、先生—園児Aの会話が優先されるということである。

以上の3点を特徴としてなされていく会話の形式的構造を、本研究では(一対一) × 多形式と呼ぶことにする。(一対一) × 多形式においては、会話の組織化が、例え既に成立している会話を破綻させることがあろうとも、先生主導で行われているということから、会話の組織化のレベルで、先生による会話の管理が行われていると観察することができる。

3. 一対多形式

続いて記述された会話の形式的構造は、ホームルームや作業の説明場面において頻繁に見出されるもので、先生1人が、園児達全員ないし複数と会話を進行していくものである。この形式内においては第1に、先生の発話が、発話内容とはイレリバントに(怒っているわけでも、驚いているわけでもなく) 声のボリュームを上げてなされ(ボリュームアップピング)、強調された仕方で用いられることで、その発話が園児達全員に向けられていることが表示されている。すなわち、発話の形式的運用方法の特徴によって、文脈が指定されている。第2に、会話のシークエンスのほとんどは、先生の発話ターンによって担われており、園児の発話ターンは、先生によって指定された箇所だけに、「規範的に」限定されている。第3に、先生による園児の発話ターンの指定は、全てが隣

接対によってなされている。その中には、メハンによって記述された、授業の進行を組織化するためのコアを形成する隣接対であるIRE連鎖も見出されるが、その他にも様々な隣接対を見出すことができる。第4に、「規範的に」指定されている園児側の発話ターンに対して、園児たちがそれとは異なった箇所でも強引に発話（ターン無視発話）をするケースも多く見られるのであるが、その場合、先生からサンクショナルな処遇が与えられることになる。例えば、先生からの応答を要求する園児のターン無視発話に対しては、先生はその発話に次のシークエンスを接続しないことで、園児の発話を無視するということがある。その他にも多様な仕方でも、園児のターン無視発話に対してサンクショナルな処遇が、シークエンシャルに与えられることで、ターン無視発話の逸脱性が観察可能になっている。

以上のような仕方でもなされていく会話の形式的構造を、本研究では一対多形式と呼ぶことにする。一対多形式においては、園児の発話ターンが規範的に指定されていることや、その規範を逸脱したターン無視発話に対してサンクションが与えられることなどから理解可能なように、会話の内部レベルで、園児の発話ターンが先生によって管理されている。

4. 全体的構造

以上、幼稚園の設定保育場面においては、2つの会話形式が見出されたわけであるが、この2つの会話形式は、作業場面の達成のためには（一対一）×多形式、ホームルームを達成するためには一対多形式というように、そこで達成されるべき実践内容にレリバントな形で、（一対一）×多形式→一対多形式→（一対一）×多形式…と、相互に交代を繰り返しながら、保育会話の全体を構成していた。

ここで重要なのが、形式が相互に移行する場面である。これは会話形式と相互反映的に埋め込み合っている文脈の移行を伴うのであるが、この移行も、先生による会話実践によってインデクシカルに表示されることになる。具体的には第1に、（一対一）×多形式から一対多形式にシフトする場合、先生は発話のボリュームアップによって以降の会話が一対多形式として組織されていくことを表示する。第2に、一対多形式から（一対一）×多形式にシフトする場合、先生は、一対多形式の会話内で、これから各園児がなすべき行為を説明＝指示した後、端的に「それでは、始めてください。」と述べることによって、一対多形式の終了を宣言するのである。

5. 結論

本研究の第1の目的を達成したことによって、すなわち「学級的な相互行為秩序はいかにして存立可能か」という問いに答えるためのプログラムの1つとして、幼稚園の設定保育場面の会話分析を実行したことによって、授業の会話分析の知見との関連から、本報告1.で提示した3つの可能性のうち、1つが現実的帰結として導かれた。それは、「授業の会話構造と同様の構造が見出されつつも、それとは別に幼稚園に独特な形式的構造が見出された」というものである。ここで、授業の会話構造と同様の構造とは具体的に、一対多形式に見られる、IRE連鎖を中心に、園児の発話ターンが制限＝管理されることで、会話のシークエンスが組織化されていく構造のことである。幼稚園に独特な形式的構造とは、（一対一）×多形式という、先生によって一対一の会話の組織化が管理され、先生カテゴリーを中心に一対一会話が次々と連鎖していくような構造である。

授業会話と同様の会話構造が、幼稚園の保育場面でも見出されたことは、制度的文脈を越え、学級という場でなされる相互行為に普遍的な方法的秩序が存在している可能性を示唆している。重要なのはそれが「規範的に」組織化されているという点で、この秩序からの逸脱も多く見られるのであった。このことは以下のような含意を持つ。それは、学級的な相互行為秩序が存立可能になるための1つの重要な要素が、本研究及び授業の会話分析で記述されたような、学級に普遍的に存在する会話秩序の規範的組織性が遵守されていないということである可能性を示唆しているのである。

幼稚園独特の会話構造として記述された（一対一）×多形式については、実はこれから検証されていかなければならない、2つの可能性がある。1つ目は、本当にそれが幼稚園に特徴的なものである可能性で、2つ目は、それが狭義の学校や保育所など、他の学級でも見出すことのできるものであることの可能性である。その意味では（一対一）×多形式は、「いまだ幼稚園でしか見出されていない会話構造である」と記述した方が適切であると言える。本研究の立場からは2つ目の可能性が高いと思われるが、それはこれから、他の学級における研究を実行することによって検証されていかねばならない。

<参考文献>

Mehan, H., 1979, *Learning Lessons: Social Organization in the Classroom*, Harvard University Press